# Ⅰ　キリスト教自然神学とは何か

本研究は、ニュートンとニュートン主義における自然神学の内実とその思想史的意義の解明を目指すものであるが、その際に前提となる事柄の一つに、「自然神学とは何か」という問題が存在する。自然神学をめぐっては、そのキリスト教思想における位置づけに限定しても、これまで多くの議論がなされてきた。この問題は学問としての神学の成立にも関わっており、その点でキリスト教思想にとって重要な意味を有している。本稿では、ペリカンの自然神学に関連した最近の研究を手掛かりに、キリスト教自然神学がそもそも何であり、またいかなる思想史的文脈に置いて成立したかについて考察してみたい。

ダルフェルスは古代の思想的文脈におけるキリスト教神学とその起源について次のように論じている。(1)「神学は哲学の部門あるいはその部分として出発した。……それゆえ神学は合理的な起源を持ち、その主要な源泉は宗教的伝統ではなく、哲学的反省である」(Dalferth[1988], p.19)。これはキリスト教神学についてではなく、古代ギリシャの神学思想（万物のアルケーを探求する哲学の一部門としての哲学的神学）について言われたことであるが、「神学はギリシャの発見であった」(ibid., p.32)という指摘はキリスト教神学の起源に関しても無関係ではない。なぜなら、アウグスティヌスが『神の国』第６巻において紹介している神話的神学、国家的神学、自然的神学の三分枝体系（ウァルロの言う三種類の神学）は、キリスト教神学の成立の直接的背景を成しているからである。ソクラテス以前の自然哲学者のアルケー探求からストア哲学のロゴス神学に至る古代ギリシャの神学の発展は、自然的神学あるいは哲学的神学の伝統を形成しており、民衆の敬虔さに基づく神話的神学や宗教的イデオロギーの担い手である国家的神学(国家祭儀の神学)とから明確に一線を画している。キリスト教神学がギリシャ的な学の理念に基づく学問的営みとして成立する場合、キリスト教神学はこの自然的神学の特性を継承したのである(ibid.,32f.)。もちろん、キリスト教神学は学問的営みであると同時に、教会的な宗教的敬虔さにその経験的基盤を有するものであり、その限りにおいて神話的神学との共通性を保持しており、またローマ帝国の国教となって以来明確になるように次第に国家的神学という性質も自らの内に組み入れるようになる。こうした状況にあって、キリスト教神学が独自の神学として成立するための場となったのが、キリスト論と三位一体論であったのである。これらのキリスト教の基本教説においては、一方ではキリスト者の救済経験に即していることが要請され（→神話的な民衆の神学)、他方では論理的な整合性が争われた（→哲学的神学)。そして、激烈な論争は教会政治と世俗政治と深く関わっていたのである（→国家的な政治神学)。したがって、「キリスト教神学は本質的にキリスト論であった（し、キリスト論なのである)。……キリスト論の合理性は神学的合理性の試金石である」(ibid., p.38)。

以上のダルフェルスの議論は、キリスト教自然神学を理解する上でも重要な指摘と言えよう。すなわち、キリスト教自然神学の成立に関しては、神学自体の成立の場合と同様に、聖書的キリ

スト教的宗教と古代ギリシャ文化（宗教と哲学思想を含む）との出会いが問題になるのである。この出会いがもたらす思想的課題に取り組むものとしてキリスト教神学は成立したが、この思想的課題の中心にキリスト教とその神学の合理性の問題が置かれ、自然神学はこのキリスト教の合理性の問題に直接関わっているのである。本稿では、ペリカンによる自然神学についての研究を参照しつつ、こうした点を具体的に検討してみたい。

ペリカンは、９２年から９３年にかけての「ギフォード講義」(「キリスト教と古典文化、キリスト教とヘレニズムとの出会いにおける自然神学の変貌」）において、４世紀のギリシャ教父の思想を詳細に検討し、また９６年の「トーマス・スペンサー・ジェローム講義」ではさらに聖書的思惟とギリシャ的思惟との遭遇という文脈におけるキリスト教神学の成立について研究を精力的に押し進めている。[(2)] ここでは、キリスト教自然神学とはそもそも何であったのかという問題に絞って、ペリカンの所論を概観することにしよう。これによって、自然神学が宇宙論的な神の存在論証のような自然・経験から神の存在を推論する議論（いわゆる存在の類比）に限定されるのではなく、むしろキリスト教思想の合理性とコミュニケーションの問題としての広がりを有していることが明らかになるであろう。

まず、ペリカンによれば、キリスト教思想における固有の思想的営みである「自然神学」は４世紀のカッパドキアの三（あるいは四）教父の思想において確認することができる。つまり、「キリスト教とヘレニズムとの出会い(encounter)」が「まさに＜自然神学＞という観念の歴史的母体(matrix)」なのであって、この「出会いと総合とはいわゆるカッパドキアの三教父、つまりナジアンゾスのグレゴリオス、カッパドキアのバシレイオス、ニュッサのグレゴリオスの三人の思想と後の二人の姉でありいわば＜第四のカッパドキア教父＞であるマクリナの思想において具体化された」(Pelikan[1993], p.ix)。もちろん、カッパドキアの三教父の場合において明かなように、キリスト教自然神学が聖書とユダヤ教の思想史に依拠しているのは当然であるものの(ibid., p.181)、それはヘレニズムの諸思想（哲学的あるいは自然的神学）との遭遇という歴史的現場において具体化したのであって、この歴史性ぬきにキリスト教自然神学の意味を理解することはできない。

以上の点に関連して、４世紀のカッパドキアの三（あるいは四）教父は、キリスト教思想史において決定的な位置を占めている。「４世紀のドグマとカッパドキア教父たちの教義神学とにおけるこれらの根本的な諸前提の位置からして、それらは２０世紀を含めた彼らに続く教会史の全世紀に対して歴史的優位を占めているのである」(ibid., p.185)。カッパドキアの教父の自然神学は、アウグスティヌスとペラギウスとの論争、ギリシャ的東方とラテン的西方との教義討論、中世後期の教義的な多元性、宗教改革期を通した西欧キリスト教世界の分割、啓蒙主義と神学的自由主義とによってもたらされた変動、エキュメニカル運動における諸努力に対して、「時代の内部で様々な諸体系の支持者たちがすべて無意識に前提している根本的な仮定」なのである(ibid.,)。

では、この場合の自然神学とは何を指しているのであろうか。ペリカンは自然神学を弁証とし

ての自然神学と前提としての自然神学という二つの形態に分けて論じているので、ここでもこの類型にしたがってペリカンの説を概観することにしよう。

まず、弁証としての自然神学であるが、これはヘレニズムと遭遇したキリスト教が自らの立場を説明し、あるいはヘレニズム文化の側からの批判に答えるという作業において思想的に展開された。この際に、キリスト教はヘレニズムに対して、いわば肯定と否定の二重の関係（弁証法的関係）を構築することになる。具体的にはカッパドキアの教父たちは、ヘレニズム世界のある部分をキリスト教との共通部分として受容し、別のある部分は批判的に退けることになる。「カッパドキアの三人（あるいは四人）の各々は、古典的ギリシャ文化の伝統にはっきりと立脚すると同時に、この伝統を激しく批判した」(ibid., p.9)。肯定的に受容されたのは、ギリシャ語とギリシャ的な教育、そしてギリシャの修辞学と論理学であり、また「ギリシャの哲学の諸学派の目録を列挙するのはカッパドキアの教父たちが好んで用いた修辞的な手段であった」(ibid., p.19)。この目録には、エピクロス派、ストア派、プラトニズムなどが含まれるが、とくに『ティマイオス』はバシレイオス、ニュッサのグレゴリオスらの宇宙生成記（『ヘクサメロン』）にとって決定的な関わりを有していたのである。[3]「カッパドキア教父らの、そして教父時代からビザンチン時代を通じた全体としてのギリシャ的キリスト教の伝統の自然神学は、ヘレニズムとの出会いの産物であった」(ibid., p.21)。

これに対して、カッパドキアの諸教父たちが明確に退けたのは、ギリシャの宗教や文学における神話（ヘシオドスの神統記など）と儀礼である。「彼らはギリシャの宗教と文学の＜神話＞とギリシャの思想家における＜自然神学者＞とを区別した。キリスト教とヘレニズムとの出会いが主要に関わっていたのは、これらの＜自然神学者＞であった」(ibid., p.28)。 注目すべき点は、この神話批判に際して、カッパドキアの教父たちがギリシャ哲学における哲学的な神話批判を受容していることである。「この弁証論の方法は、不明瞭な仕方においてではあるがギリシャ人の自然神学に含意されていた真実な教義を引き出す試みるによって進められた」(ibid.,)。ギリシャの思想家がオリンポスの激情に駆られた神々を哲学的に批判したことに背後には、おぼろげの一神論が含意されているというわけである。このように、カッパドキアの教父たちは、ギリシャ文化のある部分（例えば哲学思想）とキリスト教との共通性（多神教的神話の批判）を手がかりに、ギリシャ文化のその部分を受容しつつ、他の部分（神話と儀礼）は拒絶するという仕方で思想を展開したのであり、これによってギリシャ世界におけるキリスト教の弁証が試みられたのである。ペリカンはこれを弁証としての自然神学と名付けている ── ニュッサのグレゴリオスの定式で言えば「道徳的で自然的な哲学」 ── 。

以上をまとめるならば、弁証としての自然神学は、「キリスト教と古典文化との平行性と対照性とを指摘し、平行性から真理を引き出す弁証的方法」(ibid., p.30)を意味していると言えるであろう[4]。この場合に、「自然」とは、外的自然世界という意味に限定されるのものではなく ── 外的自然世界とその中の諸事象から論理的に神を推論する思考作業は自然神学の典型例あるいは代表例ではあっても、より基本的な自然神学的思惟に対しては二次的であり派生的である

――、むしろ第一義的には人間としての自然本性を指していると考えねばならないであろう。この意味での「自然」は人間の本性に内在しており、その点において特定の文化圏や時代を超えた普遍性を有しているのである。なお、とくにカッパドキア教父が古典ギリシャの自然神学において注目したのは、魂の不死性の教説、神論、創造論、善にして力強い神の摂理の教説の４つである(ibid., p.32)。

次に、前提(presupposition)としての自然神学に移ろう。ペリカンによれば、「弁証として自然神学」として始まった自然神学の思惟は、「前提としての自然神学」へ展開されることになる。その際に重要なのは、自然神学の受け手の変化である。「カッパドキア的な弁証としての自然神学と前提としての自然神学との間の非連続と連続とは、少なくとも部分的には４世紀の革命的な政治的、教会的、そして文化的な出来事によって引き起こされた聴衆の変化に根ざしている」(ibid., p.186)。これは、４世紀がローマ帝国によるキリスト教の公認と国教化の時代（コンスタンティヌス的転換）であったことを思い起こすならば、容易に理解できる事態であろう。つまり、キリスト教は公認・国教化を経て、自らの真理を環境文化世界に弁証する存在から、いわば自らの真理性を前提として議論をなし得る存在へと移行したのであり、それはキリスト教思想が弁証という課題とは別の課題を自らの主要な問題として意識するようになったことを意味する。とくに問題化するのは、正統教義と正統教会の確立に伴う異端との激しい論争である。異端と異教との相違は、正統教会と共有する諸前提の範囲の違いにおいて理解することができる。例えば、ギリシャ神話に表現された異教は多神教である点でキリスト教とは明確に区別されるが、異端的キリスト教は一神教内部における相違であり、その場合に一神教と多神教という範囲における区別は問題にならない。したがって、異端との論争においては、より厳密に相手と共有される諸前提の範囲を規定することが必要になるのである。前提としての自然神学は、「異端に対する論証における諸前提」に他ならない(ibid., p.188)。

> 「違いは、正統派がこの共有された諸前提から正しい三一論的またキリスト論的な結論を引き出したのに対して、異端派はそうしなかったことである。しかしながら、エウノミオスに対する論争における他の諸点においては、ニュッサのグレゴリオスが扱った諸前提は少なくとも部分的には自然神学に基づいていた」(ibid., p.188)。

もちろん、神学的思惟が依拠する諸前提は自然神学のみから得られるのではなく、啓示からも由来することは言うまでもない。神学的な議論や推論は啓示と自然という「二つの前提」の結合において進められるのであり(ibid., p.189)、ニュッサのグレゴリオスは神学体系におけるこの「前提」の位置づけ（方法論的公理、第一原理）を十分に意識していたと言われる(ibid., p.192)。

議論を整理しよう。正統と異端の相違は結局次の二つの仕方で現れることになる。一つは、議論の前提の相違（異端が依拠する誤解された前提）と共有された前提から推論を行う際の推論の仕方の相違である。「異端は誤解された＜前提＞から論理的帰結によって誤った結論に至る」

(ibid., p.193)と共に、「異端の体系は、有効な前提に立ちつつも、それらから誤った結論を引き出すことが可能であることを例証した」(ibid.,)。したがって、異端との論争は、こうした誤った前提と誤った推論とから生じる誤謬をいかに有効に論破するのかという観点から進められることになる。この際に、先に見た弁証としての自然神学が再度問題になるのである。

先に、自然神学の二つの形態に関して、弁証としての自然神学から前提としての自然神学への移行が指摘された。しかし、両者の関係は単なる交代ではなく、むしろ相補性において理解されねばならない。確かに、「弁証としての自然神学によってならば十分であったようなものが、教会教義学における前提としての自然神学としては不十分であった」(ibid., p.195)のであり、両者には明らかにその神学体系内の位置づけに関して相違が見られる。しかし、この相違は両者が無関係であることを意味しない。「第一のものは弁証神学における課題であり、また第二のものは組織神学における課題である。事実、第一の弁証学における結論としてアタナシウスが提示した諸論点は第二の体系学の形成を助ける諸前提となったのである。弁証神学と組織神学の間のこれと類似した相補性は、およそこの一世紀ほども前に、オリゲネスの二つの思弁的な代表作である『ケルソス駁論』と『原理論』において顕わになっていたのである」(ibid., p.37)。さらに言えば、「ギリシャ哲学に対するキリスト教の立場についてのカッパドキア教父たちの考察は、彼らが行った異端に対する正統的立場の提示と多くの共通点を持っていたのである。それは、とりわけ彼らが前提としての自然神学を用いたことに当てはまる」(ibid., p.188)。

こうした自然神学の二つの形態の相補性は、神学における弁証と異端論駁の二つの作業が自らの立場の合理性の表明あるいは論証という作業を共有していることに基づいている。異教や異文化に対する弁証の論理は、異端の非合理性の暴露においても有効性を発揮し、また異端を論駁するために示された自らの立場の合理性・正統性の論証は、弁証という場においても重要な働きをなし得るのである。いずれにおいても、コミュニケーションの相手として想定される他者と議論がかみ合うのに必要な知識や認識が前提とされているのであり、この源泉が哲学的思惟において探究されてきた人間の自然本性に求められたということは、当然のことであったと言うべきかもしれない。異文化に対する弁証と異端に対する正統的教会神学の構築という二つの作業 ── 両者が自然本性における合理性や普遍性に依拠する限りにおいてであるが ── が、それぞれ自然神学という性格において捉えられたのは、以上の意味においてなのである。

では、こうしたキリスト教的な自然神学の構築は、いかなる点で、古典ギリシャにおける自然神学に対する独自性を有していたのであろうか。これは、ペリカンが「古代ギリシャの自然神学の変貌(metamorphosis)」と呼んだ論点に関わっており、先に引用したダルフェルスがヘレニズム神学の三分枝構造に対するキリスト教神学の独自性として論じていた問題に他ならない ── キリスト教神学は民衆の宗教経験に基づく点で哲学者の自然的神学と異なり、哲学的神学の伝統から学としての特性を受け継いでいる点では神話的神学からも区別される ── 。この点でも、自然神学の成立の問いは、キリスト教神学自体の固有性の問いに本質的に関わっているのである。このキリスト教自然神学の独自性はその担い手である思想家の独自性から解明することができる。

「カッパドキアの教父たちの神学における弁証家としての課題は、福音伝道者としてのまた牧会者としての課題と密接に関連していた」(ibid., p.34)。「古典的体系においては、自然神学は祭儀的実践と伝統的な宗教的しきたりについての二次的物語とに対するもう一つの選択肢として、あるいは解毒剤としてもっぱら提示される傾向にあった。その主要な解説者は、伝統的なしきたりの公的な代弁者でも、また祭儀の司祭でもなく、俗人の哲学者や弁証家だったのである。また、彼らはしばしば伝統や祭儀に対する敵対者あるいは批判者であり、懐疑主義者や不可知論者、さらには無神論者でさえあった」(ibid., p.38)。

こうしたギリシャ的な自然神学者に対して、カッパドキアの思想家たちは、「哲学者であり弁証家であっただけでなく、同時に司祭や高位聖職者だったのである」(ibid.,)。したがって、キリスト教自然神学は合理的な宗教思想（異教や異文化においても受容できるような）という形態をとると同時に、異端者に対して正統信仰を体系的に提示するもの、その点で教会的伝統とその敬虔さに根ざしたものなのである。「自然神学は根本的な変貌を被った。それは弁証神学であるだけでなく、体系的、教義的神学の前提となったのである」(ibid.,)。「古典的思想家の反宗教的で無神論的でさえある哲学と自然神学とに対して、このキリスト教哲学を特徴づけているのは、それが素朴な信仰者の信仰に適合され得たという点なのである」(ibid., p.180)。確かに、合理性という点で問われているのが人間の自然本性の問いであることは、古典ギリシャの場合と共通しているが、キリスト教神学の合理性は信仰、啓示との関連において再解釈され変貌を被った合理性なのである。ここで、パウロの言うキリスト教的な知恵の理解を思い起こすことは決して場違いではないであろう。

本稿では、ペリカンの議論の骨子をこれまで概観してきたが、結局キリスト教自然神学とは何なのであろうか。

①自然神学は異文化に対する弁証（古典文化への弁証）と異端に対する論駁（教会に対する教義学）という二つのフロントにおいて成立し ── 「二つのフロントの戦い」(ibid., p.199) ──、これらを相互に連関づけている神学的思惟である。

②キリスト教神学は論理の整合性を基本とする自然神学的合理性との一致と、啓示内容への相関性という二つの条件によって規定される。「カッパドキアの四人のすべてにとって、ニカイア的な正統主義は、自然神学の諸前提と＜一致＞すると同時に、啓示神学の諸前提と＜首尾一貫＞した体系として存在しているのである」(ibid., p.195)。自然神学は啓示神学の内容を弁証あるいは論駁という場において合理的に展開するという課題を担っており、そのために有効な概念構築が試みられたのである。

③自然神学は、弁証と論駁という他者とのコミュニケーションにその成立の場を有しているのであり、自然神学は、この意味において、キリスト教思想のコミュニケーション合理性の問題と解することができる。(5)「キリスト教神学は古典文化の最良のものとの間で、多くの他のアプリオリな諸仮定だけでなく、＜神＞や＜神的自然＞の定義をも共有しているということを前提する

ことができたのである。キリスト教神学は、それらの仮定や定義と正統主義とが＜首尾一貫＞し＜一致＞していることを、ギリシャ的体系と他のキリスト教の諸体系とに対して弁護する義務を負っていたのである」(ibid., p.196)。

## 注

(1) Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Basil Blackwell 1988

(2) Jaroslav Pelikan, *Christianity and Classical Culture. The Metamorphosis of Natural Theology in the Christian Encounter with Hellenism*, Yale University Press 1993

, *What Has Athens to Do with Jerusalem? Timaeus and Genesis in Counterpoint*, The University of Michigan Press 1997

なお、本稿ではペリカンの引用するカッパドキアの教父たちのテキストとその思想の内容には踏み込まず、自然神学という点にしぼってペリカンの議論を整理することにしたい。ニュッサのグレゴリオスのエウノミオス批判などの内容に関しては、次の文献を参照。

土井健司 『神認識とエペクタシス』(創文社) 1998 年

(3) この『ヘクサメロン』においてなされた『ティマイオス』と創世記との持続的な対話・対決を解明することが、Pelikan[1997]の主題に他ならない。

(4) キリスト教的弁証論におけるこうした方法論については、次の拙論を参照。

芦名定道 『ティリッヒと弁証神学の挑戦』(創文社 1995 年) 25-27 頁

(5) 自然神学がキリスト教(とくにキリスト教思想)の行うコミュニケーション合理性に関わるという点については、本研究の一環として昨年発表した次の研究論文において、トマス・アクィナスの『神学大全』を手がかりに、外部コミュニケーション(弁証)と内部コミュニケーション(異端を論駁を含むキリスト教世界内部の論争・討論)とに分けて論じられた。ニュートンの自然神学についても、それをニュートン神学の全体の中に位置づけるならば、そこに、無神論者の論駁や新しい知的状況への適合という弁証の契機と、真のキリスト教の提示(キリスト教史や聖書の集中的な研究を通しての)という内部討論の契機とが存在していることは容易に確認可能であろう。

芦名定道 「キリスト教と近代自然科学ーニュートンとニュートン主義を中心にー」

(『京都大学文学部研究紀要』 第３８号 1999 年) 147-244 頁